様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ１２１３４

研究課題名（和文）心身症・神経症児のための動画によるソーシャルスキルトレーニングツールの開発

研究課題名（英文）Development of the social skills training tool for children with psychosomatic and neurotic disorders by video

研究代表者
佐藤　幸子（SATO, YUKIKO）

山形大学・医学部・教授

研究者番号：３０２９９７８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本における不登校は増加しており，その原因として情緒的な問題が挙げられている。情緒的な問題を持つ子供は情動調整や自己表現が未熟であることが明らかになっており，対人関係形成に困難を感じている。中でも身体症状や受診に関して友達から聞かれたときに答えにくいなどの困難を持っており，それらの場面を想定したＳＳＴを開発する必要がある。
そこで本研究では，心身症・神経症児が困難と感じる「症状や受診に関連した学校場面」に心身症・神経症の子供が対応するためのソーシャルスキルトレーニングツールを開発することである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
心身症・神経症児のためのソーシャルスキルトレーニングツールが開発されることにより，直接的に心身症・神経症の子供が学校場面で対応に困る状況に対する事前の心理的準備ができ，対人関係形成の助けとなる。さらに，家族や学校教員と医療者が共通して活用できるため，家族の支援員もつながる。本研究の汎用性として，心身症・神経症児のためのソーシャルスキルトレーニングツールが開発された場合は，さらにＰＴＳＤ等への応用なども期待され，子供の心理的ケアに関する看護学的研究に寄与すると思われる。

研究成果の概要（英文）：It is difficult for children with psychosomatic and neurotic disorders to provide an accurate response when faced with questions by a friend regarding the physical symptoms of the disorder and during consultation with a therapist. In such situations, it is necessary to implement social skills training (SST). The purpose of this study was to development of the social skills training tool necessary to help children with psychosomatic and neurotic disorders cope with difficult school situations related to symptoms and consultation.

研究分野：小児看護学

キーワード：神経症・心身症　子供　ソーシャルスキルトレーニング　ツール

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

心身症・神経症児は情動調整や自己表現が未熟であることが明らかになっている。これらの能力が未熟であるために対人関係を築くことが苦手で，不登校など社会参加が困難なことによる学校不適応が生じやすい。心身症・神経症児において，この情動調整や自己表現の能力を高めるために，ストレスの認知や自己の知覚，コミュニケーションスキルのトレーニングが不可欠であることから，SSTが有効であると考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は，心身症・神経症児の学校や仲間集団における対人関係に関する困難な場面の特徴を明らかにし，その特徴的な場面に対応する対人関係形成のための生活技能スキルの発達を促進する「心身症・神経症児のためのソーシャルスキルトレーニングツール」を開発することである。

３．研究の方法

本研究の方法は，まず【研究Ⅰ】において「心身症・神経症児の学校や仲間関係における対人関係の困難が高まる場面」を抽出し，次に【研究Ⅱ】で「心身症・神経症児が困難と感じる「症状や受診に関連した学校場面」への対応方法」の明確化を行い，その結果をもとに「心身症・神経症児のためのソーシャルスキルトレーニングツール」原案を作成し，その妥当性を検証した。

【研究Ⅰ】心身症・神経症児の学校や仲間関係における対人関係の困難が高まる場面の抽出

〔目的〕本研究の目的は，心身症・神経症児の学校や仲間集団における対人関係に関する困難な場面を明らかにし，対人場面における心身症・神経症児に対する支援を考察することである。

〔方法〕平成 17 年 7 月から 28 年 7 月までに小児科外来において看護相談を受けた心身症・神経症児 33 名の相談記録を対象とした。看護相談の記録をもとに，心身症・神経症児の学校や仲間集団における対人関係に関する困難な場面に関する記録を抽出し，帰納的に分析した。分析は研究者 4 名で検討し信頼性を高めた。

〔倫理的配慮〕本研究は所属施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。既存の相談記録をもとにした後ろ向き調査であり直接同意を得ることが困難であるため，オプトアウトの手続きを行った。

〔結果〕対象の性別は男児 11 名,女児 22 名であり，平均年齢は 10.0±3.0 歳であった。心身症や神経症の診断を受けており，発達障害を合併しているものは 4 名であった。平均介入期間は 23.8±22.3 か月であった。心身症・神経症児の学校や仲間集団における対人関係に関する困難な場面として 4 つのカテゴリ【】，13 のサブカテゴリ＜＞，68 のコードが抽出された。カテゴリは【症状や受診に関連した学校場面】，【友達との関係を作る場面】，【非難や攻撃を受ける場面】,及び【自分が困っている場面】であり，【症状や受診に関連した学校場面】には<症状について聞かれる＞や<通院について聞かれる＞などの４サブカテゴリ，16 のコードが含まれていた。

〔考察〕【症状や受診に関連した学校場面】において，子供は困っている様子が伺われ，自分の症状やそれに伴う登校状況について説明できるように支援していくことが重要であることが示唆された。

【研究Ⅱ】心身症・神経症児が困難と感じる「症状や受診に関連した学校場面」への対応方法

〔目的〕は先行研究において「心身症・神経症児の学校や仲間集団における対人関係に関する困難な場面を抽出」し，中でも身体症状に関して友達から聞かれたときに答えにくいなどの「症状や受診に関連した学校場面」の対応方法を想定し対応方法のスキルアップトレーニングが必要であることを明らかにした。そこで本研究では，心身症・神経症児が困難と感じる「症状や受診に関連した学校場面」に対する対応方法について，子供の対応に熟練した学校教員や養護教諭，及び小児科病棟で経験のある看護師を対象にインタビュー調査を実施した。

〔方法〕対象は小中学校の教員，養護教諭，小児科病棟で働く看護師で各職種の経験年数が 3 年以上のもの計 15 名とする。対象者の選定は雪玉式標本抽出法を用い，１人目の対象者は研究会などで小児の心理的ケアに関心の高い教員または看護師に声をかけ，以後,雪玉式に紹介してもらう形をとった。

先行研究で明らかにした心身症・神経症児の学校や仲間集団における対人関係に関する困難な場面の中でも，特に「症状や受診に関連した学校場面」を取り上げ，以下の想定される場面において子供

や保護者への対応方法ついて，子供の対応に熟練した学校教員や養護教諭，及び小児科病棟で経験のある看護師を対象にインタビュー調査を実施した。分析はインタビューから逐語録を作成し，必要な配慮の内容を抽出・分類する。主な場面は①症状について聞かれる場面，②病院にいくことについて聞かれる場面，③学校に遅刻したり早引けしたりすることについて聞かれる場面，④親に送り迎えしてもらうことについて聞かれた場面であった。

〔倫理的配慮〕所属施設の倫理委員会の承認を得た。対象者に対し，研究目的，方法，配慮を記載した依頼書を作成し，文書と口頭で説明し同意を得た。研究への参加は対象の自由意思によるもので，途中での辞退も可能であり，その際も不利益を被らないことを保証することについて説明する。

〔結果〕 対象は小学校教員 4 名，養護教諭 3 名，小児科看護師 6 名であった。年齢は 20 代 2 名，30 代 2 名，40 代 2 名，50 代 6 名，60 代 1 名であった。平均勤続年数は 22.3±11.7 年であった。

帰納的に分析したところ，【話し合いをもつ】，【具体的に伝える方法を示す】，【子どもの心を支え る】，【クラスメートの力を引き出す】，【保護者との関係作り】，【教員の連携】6のカテゴリが抽出された。また 16 のサブカテゴリ＜＞，67 のコード（）が抽出された。

【話し合いをもつ】のカテゴリは＜保護者と担任と話し合いを持つ＞，＜どうすればいいか子どもと一緒に考える＞，＜対応方法は自分で決めてもらう＞の 3 つのサブカテゴリから構成された。病院に通っているのがわかっているときは保護者と担任が話し合いをして，どう話せばよいか家族・本人に聞き，作戦を立てて，最後は＜対応方法は自分で決めてもらう＞ことが大切と考えていた。【具体的に伝える方法を示す】のカテゴリでは，ふらふらするや胸がどきどきするなどのわかりやすい症状は＜症状をそのまま話す＞のがいいが，説明しにくい症状については＜前もって言い方を決めておく＞や＜わからないことをそのまま伝える＞，そして＜自分の気持ちをつかんで話すことを教える＞のように具体的に示すことが重要と語っていた。【子どもの心を支える】のカテゴリでは，＜恥ずかしいことではないことを説明する＞，子どもに先生に＜相談していいことを伝える＞，＜力になりたいと思っていることを伝える＞などして＜子どもとの関係を作る＞ことで子どもの心を支えていくことが大切と語られた。【クラスメートの力を引き出す】のカテゴリでは，神経症･心身症の子どもに話し方を教えたりするだけでなく＜クラスメートに子どもへの接し方を教える＞や＜子どもがいやなことをクラスメートに教える＞，そして＜クラスメートに世話をしてもらう＞などを通して，クラスメートの協力を得ていくことが大切であることが語られた。【保護者との関係作り】のカテゴリでは，先生との関係が良くないと，話を聞いてもらえず，子どもへの支援がしにくいため，まず，保護者と関係を作ルことが重要と語っていた。【教員の連携】のカテゴリでは，担任や養護教諭など教員同士の連携を取ることも重要と語られた。

〔結論〕 心身症・神経症児が困難と感じる「症状や受診に関連した学校場面」への対応方法として， 家族や子どもと相談し，子どもの心を支えながら対応方法を予め考えておくことが必要であり，一律な内容ではなく一人ひとりに適した方法を考えることが重要である。

クラスメートの力を引き出したり，家族や教員同士の協力体制を構築することも重要であることが示唆された。

４．研究成果

当初動画によるツール作成を考えたが，研究Ⅰ，研究Ⅱから心身症・神経症児が困難と感じる「症状や受診に関連した学校場面」への対応方法として，家族や子どもと相談し，子どもの心を支えながら対応方法を予め考えておくことが必要であり，一律な内容ではなく一人ひとりに適した方法を考えることが重要であることが明らかとなり，動画ではなく冊子による「心身症・神経症児のための動画によるソーシャルスキルトレーニングツール」原案を作成した。アンケート調査をもとに修正を重ね「自分で作る話し方練習帳」を作成した。以下がその完成版であり，本研究の成果である。

自分で作る

話し方練習帳

-自分のことを上手に説明するために-

名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

この練習帳の使い方

- 病院に通っていることを友達に聞かれて，なんと答えていいかわからない，困ってしまう，ということはありませんか？
- この練習帳は，自分の病気や症状を自分で理解して，上手に友達に説明するのに使ってもらうためのものです。
- 友達にわかってもらうことで，学校生活をよりスムーズで楽しいものにしましょう。
- この冊子は自分で書き込みながら完成させていきます。
- 病院に通い始めたら，なるべく早めにこの練習帳を使ってみてください。
- この練習帳は自分ひとりだけで完成させるよりも，学校の先生やお父さん･お母さんに助けてもらったほうが，より作りやすくなります。
- 病院のスタッフもお手伝いしたいと思っています。
- 病気や症状については病院で教えてもらいましょう。

一つ一つ取り組むことで，きっと上手に説明することができるはずです。

さあ，やってみましょう！

自分の病気や症状　を理解しよう！

① 今自分が感じている症状　や困っていることを，できるだけ書き出してみよう！

感じている症状

困っていること

② 症状　や困っていることについて，病院でお医者さんや看護師さんに教えてもらおう！

お医者さんや看護師さんからの 症 状について の説明

© 説明をきいて，わかったことや感じたことを書いてみよう！

わかったこと，感じたこと

病気や症状　に対する心構え

- 誰でも何かの病気を経験するものです。
- 悪いことをしたから病気になるわけではありませんし，病気になることは恥ずかしいことではありません。

- 病気はつらいことも多いので，病気の人をいたわることは大切なことです。
- 病気だからといってからかったりすることは許されません。
- 病気のときに，きちんと病院に通って治そうと努力することは，とても大切なことです。

- 何か困ったことがあるときは，他の人に相談してもよいのです。
- そんな時助けてくれる友達は，すばらしい友達です。

- それを忘れないで次のページにすすみましょう！
- 忘れてしまいそうなときは，いつでもこのページを読み返してください。

力になってくれる人はだれ？

- １人では難しいことも誰かの力を借りればできる！
- 力になってくれる人を書き出してみよう！

1．

2．

3．

- 力になってくれたら，感謝しよう！

友達にわかってほしいことは？

お友達にどんなことをわかってもらいたいですか？

	わかってもらいたい	どちらでもない	しられたくない
通院が必要なこと			
遅刻したり早退しなければならないこと			
時々保健室に行くこと			
登下校は親に付き添ってもらうことがあること			
病気について			
その他（　　）			
その他（　　）			

お友達にわかってもらいたいことベスト３

1．
2．
3．

友達にわかってもらうために

作戦を立てよう！

学校で先生たちの考えを教えてもらおう！
でも，どのように何を話すかは自分で決めていい！

わかってもらいたいことNO１

どう言えばわかってくれるかな？

わかってもらいたいことNO２

どう言えばわかってくれるかな？

わかってもらいたいことNO３

どう言えばわかってくれるかな？

話し方の練習

1．自分で立てた作戦の文章を繰り返して読んでみよう！

2．少し直したほうがいいところは，直してもOK!

2．誰かに声をかけてもらって，答えてみよう！

3．最後に「ありがとう」を言ってみよう！

・話を聞いてくれてありがとう

・わかってくれてありがとう

・助けてくれてありがとう

作成者：山形大学医学部看護学科　佐藤幸子
東北大学大学院医学系研究科　塩飽仁
岩手保健医療大学看護学部　遠藤芳子
山形大学医学部看護学科　今田志保
作成日：令和2 年6 月30 日
文部科学省科学研究費（基盤研究（C））の補助を受けて作成

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 佐藤 幸子，塩飽 仁，遠藤 芳子，今田 志保	４．巻 22
２．論文標題 心身症・神経症児が困難と感じる「症状や受診に関連した学校場面」への対応方法	５．発行年 2019年
３．雑誌名 北日本看護学会誌	６．最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤幸子，塩飽仁，遠藤芳子，今田志保	４．巻 21
２．論文標題 心身症・神経症児の学校等の仲間集団における対人関係で困難感が高まる場面の検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 北日本看護学会誌	６．最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Yukiko Sato, Shiho Konta
２．発表標題 Elements of social skills training (SST) necessary to help children with psychosomatic and neurotic disorders explain their symptoms to their classmates, teachers, and parents.
３．学会等名 4th World Congress on Patient Safety & Quality Healthcare（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤幸子
２．発表標題 心身症・神経症児が困難と感じる「症状や受診に関連した学校場面」への対応方法
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤幸子，塩飽　仁，遠藤芳子，今田志保
２．発表標題 心身症・神経症児の学校や仲間関係における対人関係の困難が高まる場面の検討．
３．学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会，仙台
４．発表年 2017年

１．発表者名 Sato Y, Konta S, Suzuki E
２．発表標題 Case study: Improving family systems through nursing care for families of children with attention-deficit hyperactivity disorder
３．学会等名 The International Council of Nurses Congress2017, Barcelona（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	今田　志保（佐藤志保） (KONTA SHIHO) (00512617)	山形大学・医学部・助教 (11501)	
研究分担者	遠藤　芳子 (ENDO YOSHIKO) (20299788)	岩手保健医療大学・看護学部・教授 (31204)	
研究分担者	塩飽　仁 (SHIWAKU HITOSHI) (50250808)	東北大学・医学系研究科・教授 (11301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関